

☆ 内外ゴムとの二本立て

日露戦争後の企業熱に乗って、いくつかの会社が生まれた。

明治 39 年 4 月 14 日、いまの兵庫区明和通 2 丁目に、坂東調帯合資会社が設立された。

従業員 20 人。代表の榎並充造(みつぞう)は 27 歳の若さだった。

創業の翌年に入社した雀部昌之介(バンドー化学前副社長)は自叙伝「私は六十年社員」に、こう書いている。

「あたりは一面の畑。その中を馬力車が通れる道が一本通っている。やがて畑の中に真新しい 60 尺くらい(約 18 メートル)の煙突が一本ポツンと立っているのが目についた。

ひょうっとしたらと思って近づくと、小さな黒い表札が下がっていて“坂東調帯会社”と書いてあった」事務所といっても机とイスが三つ四つあるだけ。「明日から出勤するように」といったヤセ型の美男子が榎並だった。

榎並は明治 12 年、神戸生まれ。県立神戸一中の第二回卒業生で、東京に出て早稲田大学に学んだが卒業後、父の死亡に伴い神戸へ戻り、実家の質屋を継いだ。しかし、美男子で社交好きときは地味な質屋は向かない。

家業は番頭まかせで、もっぱら遊ぶほうを引き受けた。派手な性格は人もつけ入りやすい。ある日、友人を介して坂東直三郎と引き合わされた。

坂東は丹波篠山の産。いまは東京で発明屋をしている、と名乗った。話を聞くと「機械のベルトは今、牛皮製だが、それは木綿で作れる。牛皮なら高くつくが、木綿ならずっと安いので必ず売れる」という。

機械を連動で回転させるベルトは、高価なものだけに、安くて効果が同じなら売れるだろう。木綿調帯の特許としては日本で二番目だが、第一号は実用性に欠けたため企業化されず、うまく行けばこれが第一号。悪い話ではない。

榎並は川西清兵衛に相談した。先代清兵衛の妻は、兵庫の榎並家から出ている。榎並から見れば日本毛織を創設した清兵衛は従姉(いとこ)のムコ。しかも榎並の亡父は充造の将来を清兵衛に頼んでいた、といいきさつがある。

「やってみてはどうか」清兵衛と、その友人、滝川弁三はすすめた。資本金 5 万円。ヒゲをたくわえたダンディーな男・榎並にはその資金はない。

川西と滝川が有限責任社員として各 2 万円を出し、榎並は 1 万円を出して無限責任者となった。雀部によれば、その 1 万円も川西から借りた、という。

榎並は坂東の持つ特許権を 3 万円で譲り受けた。支払いは特許権譲渡の登録がすむまでに 8 千円、あとは営業を始めてから純益の一定割合で分割払いする、という契約である。

19 歳の雀部は、和服に羽織を着て角帯をしめ、青い前掛け、黒タビ、ゲタばきといういでたちで通勤した。これは当時の見習い社員に共通のスタイルだった。

「ほんまは居留地へ行きたかった。居留地の商館へ入って海外へ行きたかったんだ。それが、父が榎

並さんと知り合いやった関係でここへ来たけど初任給 18 円。坂東さんの給料は 100 円だった。居留地へ行ったら 15 円ぐらいかなあ」 雀部は就職が決まってから新聞広告に目をとめた。

「広告によると、“機械の能力を能率的に伝導する木綿調帯”の効能が高らかに宣伝され、日露戦争に勝った後に成長した新興産業の意欲を示す派手な内容のものだった。私には、これからの時代を代表する新商品に見えたのだ」 事務所は雀部を含め 4 人だけ。

専属技師となった坂東は何もせず 4 人を子分のように扱っていた。創業当時の坂東調帯は、さむざむとした光景の中にあった。雀部は自伝の中で---- 「当時の兵庫駅は、山陽鉄道の基点として建設されていたため大きな操車場が西へ長く伸び、いまの増田製粉所辺りまでであった。

・・・会社の浜手(吉田新田付近)に一本、貧弱な煙突が立っているのが見えたが、紡績業界で有名な鐘紡の主力工場である兵庫工場であった。この方面には他にガス会社のガスタンクがあったほかは、工場らしきものがなかった」

雀部は、初め計算係りに就いた。

販売の先頭に立ったのは水沢八十馬支配人。坂東直三郎のオイで師範学校を出てすぐ校長になったほどの秀才、と、もっぱらの評判だった。同社創立の一ヶ月前、神戸電灯会社が電力の配給を始めたものの、当時の動力は蒸気機関。

動力伝導用のベルトは、牛皮製の帯皮がほとんどで、輸入品のゴムベルトは、わずかしが使われていなかった。牛皮は水と湿度に弱い。木綿調帯はその点でまさり、価額も半分ぐらい。水沢は弁舌さわやかにその長所を説き、体当たりともいうべきファイトで販路を拡張していった。はたから見ると、欠陥だらけの木綿調帯を、さも完成品のように売り込むようすは、山師めいて見える。

だが、水沢自身は木綿調帯というアイディアにほれ込んでいた。惚れていたから信念を持って売り込んだ。セールスは、これでなければ売れぬ。

雀部は集金に回るようになった。初仕事は尼崎の日本醤油醸造会社だった。会社始まっての大量注文だったが製品をとりかえたり修理したりで足しげく通い、苦勞のすえ 1 万円の小切手を受け取った。

集金は堺の硫酸肥料会社、大阪・安治川口の製材所にも及んだ。木綿調帯は、いわば未完成品。それがなんとか活路をつないだのは軍の国産技術育成の方針だった。阪東の親類が軍の中枢にいたことや、水沢のおそれを知らぬ売込みで、軍との関係を取り付けた。雀部の回想に----。

「あるとき水沢支配人が羽織、はかまにヒゲをいからせて、人力車にそっくり返ったまま大阪・陸軍砲兵工廠の衛兵の前を“ご苦勞”などといいながら、ゆうゆう通って行く姿を見て驚いた」 だが、熱心なセールスが、不測の事態を招いた。

42 年 2 月、呉れの海軍工廠がヨーロッパから高速度鋼切断機を購入。軍艦一隻をつくるのに 6 ヶ月も工期を短縮できる、という新鋭機だったが、機械についてきたベルトは延びてしまって使えない。そのため木綿調帯を試験使用してみる、というのだ。

試運転に技師長の阪東が立ち会った。27 日、最高速運転に入り、スリップして鋼板が切れないため、さらに調帯をきつくして空運転したところ、ベルトは継ぎ目から切断。傍にいた阪東に当たった。即死。

享年 57. 阪東の殉職によるショックは大きい。海軍工廠で採用されれば一気に販路を拡大できる、というユメは破れた。もともと未成熟品の域を出ない。不評を買うのもいたし方ないところ。なのに、やたら製造した。売れない調帯が倉庫いっぱいにたまった。若い社長・榎並充造は、事業縮小の断を下さざるを得なかった。

42年4月、手織りの木綿機 100 台を全部ストップ、100 余人の従業員を大半整理した。次いで水沢の発案で、販売会社「水沢商会」を作り、阪東式木綿調帯の販売代理店とした。榎並は代理店に販売を任せることに反対したが、水沢の巧みな根回しで川西、滝川が賛成、押し切ったという。栄町四丁目の二階建て借り店舗の堂々たる看板を掲げた水沢商会は、しかし、極度の経営不振。この難関を切り開くために榎並が目をつけたのがゴムベルトの製造だった。